

社長の経営哲学の構築にお役立ちする

経営者への活きた言葉

税理士法人 優和

TEL 03-3455-6666

FAX 03-3455-7777

経営者への活きた言葉

ノーベル賞を「国家の成長力」に変える 井上達彦（早稲田大学商学学術院教授）

- 2025年、京都大学で多孔性配位高分子を開発した北川進特別教授がノーベル化学賞を受賞した。日本の基礎研究が世界最高水準にあることを示す快挙です。ノーベル賞は単なる学術的榮譽ではない。社会、メディア、産業界、政策当局の注目を一気に引き寄せる、極めて特異な「制度化された信用装置」なのだ。
- ではこの圧倒的な注目を、いかにして産業競争力へと転換できるのか。ここで、産学官連携の真価が問われる。政府の役割はこの産学の動きを後押しする制度設計にある。研究助成や実証支援に加え、スタートアップのM&Aを促進する税制、官民ファンドによる長期リスクマネー供給、上場だけに依存しない出口戦略の整備が不可欠だ。ノーベル賞を「たたえる対象」ではなく、「育て、増幅させる国家資産」として扱う視点が求められる。
- 受賞発表の瞬間から鳴り止まなかった電話は、日本にとっての好機の到来を告げる合図でもある。産学官がその意味を正しく受け止め、同じ成長シナリオを共有できるかどうか、いま問われている。

(参考:「週刊東洋経済」2026年1月31日・2月7日号)

経営者のための理念哲学

「なぜ？」という問いは人生の生き方において大事なこと 平井敬二（山梨大学客員教授）

- 私には仕事と人生の原点ともいえる大恩人の一人が、群馬大学医学部の微生物学教室の三橋進先生です。初めて三橋先生にお目にかかって衝撃を受けたのは、Why?（なぜ）という質問を投げかけられたことでした。「君は、なぜここにいるのですか?」と。助教授の先生に助けを求めたら、「君が当たり前を思っていて、実は奇跡的なことがある。それを考えてみなさい」とヒントをくださいました。
- それから半年くらい考え続けるうちに、三つのことに思い至りました。一番目の奇跡は、この世に生まれてきたこと。二番目は、いままで死なずに生きてこられたこと。三番目が、いま、目の前の人と出逢うことのできた奇跡。私はその時から「君は、なぜここにいるのですか?」を座右の銘としました。「なぜ?」という問いを発することは、科学だけでなく、人の生き方においても大事なことだと受け止めています。

(参考:「致知」2026年4月号)

新規成長分野

変わるメガバンクの店舗戦略

- メガバンクの店舗戦略が様変わりした。統廃合を進めてきたが、個人顧客に特化した軽量型に切り替えて出店を加速しつつある。三菱UFJ銀行は2025年9月、JR高輪ゲートウェイ駅（東京・港）に直結する商業施設で、約20年ぶりとなる新店舗を開業した。「エムットスクエア」という名称だ。営業は平日と土曜日の午前11時から午後6時まで。将来的には80~100店舗まで拡大する計画だ。
- 他のメガバンク2行も、これと近いイメージを描いている。三井住友銀行は約250店を商業施設内などの小規模店舗「ストア」に転換する計画を進めている。みずほ銀行も25年3月、個人向けの新型店舗「みずほのアトリエ」を開き、口座開設の専門店も出した。
- こうした新店舗は既存型より数倍の集客力があるといい、どのメガバンクも大きな手応えを感じている。(参考:「日経ビジネス」2026年2月2日号)

古典に学ぶ

「空(くう)」を「そら」と考えてみる

- 「空(くう)」を「からっぽ」ではなく、「そら」と考えてみる。常に頭上にある「そら」の存在を、否定する人はおらず、その誕生や死を正確に語れる人はおらず、その変化をコントロールできる人はいない。
- 人々の生活を包むように、ただそこにあって、常に姿を変え続けているが、一瞬たりとも「そら」でなかった時はなく、必ず「そら」である。

(参考:加藤朝胤監修「超訳 般若心経」:リベラル文庫)